

美術科教育学会通信 NO.34

1999年9月30日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室

TEL : 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX : 0734-57-7509,7508 (同)

通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX : 0742-27-9223 (宇田研直通)

リサーチ・フォーラム報告

リサーチ・フォーラム '99 を終えて

スーパーバイザー
宮脇 理 (元 筑波大学)

1. イデオクラシーと「規範」問題

このたびのリサーチ・フォーラムが掲げた「規範」問題は、前執行部が1992年から5年間に計20回にわたり開催した公開シンポジウム(通称出前シンポ)に散見された難問の一つでもあった。

「規範」の解釈には状況との相関を入念に考えねばならないが、斯学に限らず教育の根底ともなる国家の目的が絞り込めない現実、加えて個人が法をも替えることが可能な個人の権利を謳歌できる時代、云い換えれば大衆民主主義に向かう現実の中で「規範」を考えることはそれほど容易なことではない。したがって筆者はリサーチ・フォーラム '99の実施にあたって、その概要にジャン・ベシュレルの「イデオクラシー(イデオロギー政治体制)」を援用することにより「規範」問題への接近の在り方の一つを提示した。

ジャン・ベシュレル(Jean Baechler, 1937~)は現代フランスの社会学、歴史学、政治社会学の専門家として早くから知られているが、今世紀を『二〇世紀、大いなる逸脱』と命名し(註1)、二〇世紀を人類史の全体図の中の「偶発事



リサーチ・フォーラム '99 (1999.8.27 於、ぺんてる本社会議室)

件」と措定(ソテイ)しているところが興味深かったからである。また氏の言説には日本の近・現代史の省察に重ねられる可能性もある。前後したがベシュレルが括弧に入れた(1914年～1991年)とは、云うまでもなく第一次世界大戦の勃発に開かれ、1991年8月の旧ソ連の崩壊で閉じられた時代である。

さて、彼のテーゼの核となる近代の概念には「16世紀から17世紀初頭にかけてのヨーロッパに、人類がその自然性を取り戻すのに必要な諸条件が集中的に出揃った」とあり、近代とは、こうして取り戻した自然性を数世紀かけて具体的に開花させる過程だった」とあるが、彼の云う「自然性」とは「自由」、「目的性」、「合理性」のことであり、これを彼の別の言葉でいえば「政治的表現が民主主義、その経済的表現が資本主義、その心理的表現が個人主義となる。この自然性を文化に変換するための巨大なプロジェクトが始まるはずであった」との意であった。

2. 「映像歴史学」の欠落

「イデオクラシー」を括弧に入れることで近・現代の再出発が見えてくることもある。し

かし、仮に「イデオクラシー」の時代を“引き算”したとしても、捻れて進んできた近・現代をその振り出しに戻すことはできまい。なぜならいまや人権・権利を核とした与えられた大衆民主主義の時代に突入したこと、素朴な工業社会は仮想空間にまで入り込んでしまったのが「現在」だから、今後、仮に(イデオロギー政治体制)が回避できたとしても、新たに「民族主義」そして「宗教」問題が浮上、顕在化することは避けられないと思う。だとすれば、感覚までを射程に収め得ることの可能な「映像歴史学」「映像人類学」つまり山谷哲夫が映画『天安門』によって指摘した視点を論考と共存させることによって「規範」問題につづく斯学の課題に接近することが可能となると思われるのだが(註2)。

(註1)(山本一郎訳：新評論1997刊、原題『大きな括弧(1914年～1991年)歴史の一つの偶発事件についての試論』1993年刊)参照。

(註2)山谷哲夫「映画(天安門)への三つの視点」1997 アップリンク刊『天安門』pp.28～30参照。



リサーチ・フォーラム'99(1999.8.27 於、ぺんてる本社会議室)

リサーチ・フォーラム報告

コーディネーター
新井哲夫（群馬大学）

8月27日（金）午前10時より、ペんてる本社ビル会議室において、美術科教育学会課題研究会「リサーチ・フォーラム'99」が、「美術教育における“ディズプリン（規範性）”」「美術の論理」と「子どもの論理」を今年度の課題として開催されました。詳細は学会誌第21号で報告される予定ですので、ここでは口頭発表を中心にごく簡単に報告します。

【当日の流れ】

はじめに

- *開会にあたって 代表理事・花篤 實
- *リサーチ・フォーラムについて/事務局・永守基樹
- *本年度の課題について/コーディネーター・新井哲夫
口頭発表

(1)「美術の一般的方法論をベースとした“規範性”」
金子一夫（茨城大学）

質疑 指定質問者・長田謙一（千葉大学）

(2)「現代美術(70年代以降)をベースにした“規範性”」
那賀貞彦（大阪教育大学）

質疑 指定質問者・渡辺晃一（福島大学）

(3)「子どもの活動をベースにした“規範性”」
水島尚喜（聖心女子大学）

質疑指定質問者・山木朝彦（鳴門教育大学）

討議 司会進行 コーディネーター・宇田秀土
おわりに

- *今後の展開について 事務局長・長谷川哲哉

【発表及び討論の概要】

金子氏は、現在の教育改革を「主観絶対主義」「情緒規範主義」を助長するものとして批判し、現実的・合理・常識的判断のできる人間を育てる必要性を論じ、美術教育においては、拡散した美術表現の様式・形式・手段を、論理性をもった教育内容・方法として再編成することが課題であり、美術の方法論を教育内容とする美術教育の在り方を提起した。

那賀氏は、美術教育の「ディズプリン」を考える際の基本的な条件を整理しながら、美

術教育ディズプリンの変遷を「リアリズム教育」から「表現主義教育」、そしてさらに「マネリスム教育」への展開として位置づけ、20世紀後半(70年代)の美術を基礎においた美術教育の内容、方法の体系化の必要性を論じた。

水島氏は、学習指導要領の作成に関わった立場から、子どものアクチュアリティーから出発することや、子どもと教師の関係性に注目することの重要性を指摘し、学習指導要領の変遷を例に挙げながら、教科の論理ではなく、子どもの内的な資質や能力から出発する美術教育への転換の必要性を論じた。

指定質問者による質疑では、金子氏に対して、長田氏から近代美術のシステムや方法論の提示以上に、アートそのものの生成の原理に立ち戻ることが重要なのではないかといった指摘が、那賀氏に対しては、渡辺氏から「マネリスム」の概念、現代美術における作品制作の方法、那賀氏自身の実践等について補足説明の要請があり、また水島氏に対しては、山木氏から「造形遊び」と社会や芸術、コミュニケーションとの接点、消費社会の中の「生きる力」、「鑑賞」をどうとらえるか等について質問が出された。

スーパーバイザーの宮脇氏からは、ベシュレルのイデオクラシーの概念に拠りつつ、100年単位のスパンの下に「ディズプリン」「子ども」「媒体」等の問題をとらえる視点の提示があった。

討議では、フロアーから「造形遊び」に対する質疑、美術教科書における方法論の問題、教員養成の問題等に関わる質問、意見があった。後半、発表者間での議論が行われ、宮脇氏から「ディズプリン」の問題は二者択一的にはなく、異質なものを併置的にとらえる必要があるとの指摘があり、討議を終えた。当日の参加者数は59名（スタッフ・発表者14名を含む）。



事務局より

‘99年夏季役員会の報告

学会事務局長

長谷川 哲哉 (和歌山大学)

恒例の夏季役員会が去る8月26日午後に東京日本橋のぺんてる本社ビルで開催されましたので、ここに議事及び報告の内容を報告します。出席者は21名でした。

永守理事(事務局庶務担当)の司会のもと、花篤代表理事の開会挨拶がなされ、続いて議題に入りました。

1. 新入会員の承認

長谷川より4月以降8月24日までの全入会申込書が提示、説明された後、異議なく申込者全員が承認された。

2. 学会費改定案

岩崎理事(事務局会計担当)より、資料(98年度決算報告と99年度予算案)に基づいて学会会計の危機的状況が説明された後、現行の年学会費6000円を8000円に改定する案が出された。

続いて長谷川より、他学会の会費調査の結果8000円が標準的と判断されるし、改定によって会計状況が改善された暁には会員サービスの質・量の向上(例えば学会誌掲載論文のCD-ROM配布)を図りたい等の説明がなされた。意見として、学会誌配布を当該年度会費納入者に限定する、会費納入を銀行口座引き落としに変更する、等が出されたので、これらを事務局で検討することにして、改定案が承認された。

3. 学会大会について

三浦氏(天形理事代理)より3月の福島大会(第21回)の組織・内容・参加者数等について詳細な事後報告がなされた。続いて福本氏(辻田理事代理)より来年3月27~29日の兵庫大

会(第22回)とプレ学会(本年12月4日)の開催計画について詳細な説明がなされ承認された。続いて花篤代表理事より第23回大会を筑波大学が引き受けることになったとの報告の後、今後の開催大学決定方法の検討を学会活動担当理事にお願いしたいとの要請があり、宮脇担当代表理事より承諾の返答があった。

4. 学会誌21号の査読結果について

柴田編集委員長より21号投稿論文の査読結果について詳細な説明がなされ、質疑応答の後承認された。その他、同委員長より掲載論文の水準確保のために2分冊化の具体案を編集委員会で検討する、合わせて査読フローチャートや投稿締め切り日等の問題点について検討するとの提案が出され、議論の後承認された。なお出版助成金の申請は継続するが、事務作業は事務局が担当することとなった。

5. 第18期日本学術会議団体登録について

長谷川より、表記登録申請の手続きを無事完了したとの報告の後、科研費審査体制の変更に伴って教育学研連か教科教育研連のどちらかに本学会は所属を選択せねばならないとの状況説明がなされ、従来どおり教科教育研連に所属することに決した。なお竹内理事よりの学術会議担当理事一名増員の要請が長谷川より紹介され、事務局が東京近辺在住理事より入選することとなった。

6. 第18期日本学術会議会員候補者の推薦人について

長谷川より、表記の推薦人として慣例により事務局担当の副代表理事(長谷川)を届け出たいとの説明があり、了承された。

7. リサーチ・フォーラム(RF)の企画について

宇田理事(事務局、今回RFコーディネーター)より明日のRF企画の概要説明がなされ、また今後の企画運営の開放化の意向が示された。RF記録の学会誌掲載の要望も出され、編集委員会と事務局とで検討することとなった。

報告事項

(1) 今年度の文部省出版助成金の額50万円に

内定。昨年より減額。

(2) 学会通信34号10月初旬発行予定。RF成果の広報計画。

(3) 学会誌掲載全論文の学術情報センターよりのインターネット上公開可能化。学会HPの充実化。

(4) 事務局より学会誌を2500円で販売の実行。

その他

学術体制再編の時期には他学会との連携・協力関係の模索が必要との意見が出された。

公開シンポジウム(プレ学会) 開催のお知らせ

福本謹一(兵庫教育大学)

第22回美術科教育学会兵庫大会を控えて、プレ学会を下記要領でシンポジウム形式で計画しております。多数のご参加をお待ちしております。

シンポジウム・テーマ

「越境の時代・美術教育実践学の視座」

シンポジウムの趣旨

社会的にはクロスオーバーやクロス・カルチャー、ボーダーレスというキーワードはすでに色あせている。しかし、知の先鋭化と総合化とのせめぎ合いの中で現在の教育改革は、総合化へのモメントをより強め、クロス・カリキュラム、「総合的な学習の時間」、環境教育、異文化理解といった従来の教科の枠組みを超えた学際的なアプローチや社会的課題そのものを学習の対象もしくは内容・方法とすることを特徴としている。

かつてイーリッチが提唱した「移動教室」「広範な技能の交換」「仲間同士の調和」といった柔軟な学習組織は、教育制度の再構築やインターネットによる新たな学習空間においてよみがえる可能性をかいま見せ始めた。こうしたすべてが柔構造をもち、「越境」しつつあ

る現在にあって、美術教育における実践とは何であったのか、何であるのか、そして何であるべきかを総括し、再検討することが20世紀最後の年に課せられた重要課題である。

こうした視点に立ち、美術教育だけでなく、音楽教育の研究者も含め4名のパネリストによる芸術教育実践シンポジウムを行う。

パネリスト

長島真人(鳴門教育大学・音楽科教育学)

有道 惇(岡山大学・音楽科教育学)

永守基樹(和歌山大学・美術科教育学)

茂木一司(群馬大学・美術科教育学)

コーディネーター

辻田嘉邦(兵庫教育大学・美術科教育学)

日時

平成11年(1999)12月4日午後1時~3時

場所

サクラクレパス本社ビル7階会議室

〒540-8508

大阪府中央区森ノ宮中央1-6-20

TEL: 06-6910-8807

参加費 無料

ご注意

このシンポジウムは芸術教育実践学会(12月4日、5日)との共催の形をとるため、芸術教育実践学会の受付で美術科教育学会員用の受付を別に用意します。

連絡先

〒673-1494

兵庫県加東郡社町下久米942-1

兵庫教育大学芸術系教育講座

辻田嘉邦研究室 TEL: 0795-44-2253

福本謹一研究室 TEL: 0795-44-2255

研究ノート / 実践報告

玩具工芸の研究 / 世界の木工玩具の研究と制作 主に動く玩具に関して

エルツゲビルゲ(旧東ドイツ)とニューイングランド(アメリカ)の木工玩具について

春日明夫(東京造形大学)

私は上記のような内容の研究を行っている。研究と言えば立派に聞こえるが、実は自分の趣味を正当化するために、無理やり理屈をつけているのが正直なところである。

私はこの10年間で、世界18ヶ国約300点余りの木の玩具をコレクションした。一口に木の玩具と言っても多種多様である。私が主に収集しているのはMoving Wooden Toys、すなわち動く木の玩具である。おもちゃの世界的コレクターとしてテレビでお馴染みの北原照久氏がコレクションしているような、ブリキやプラスチックの玩具類にはまったく興味が無い。あくまでも“木”と“Crafts”にこだわりをもちながら収集している。現在は、中でもデザイン性と伝統性に秀でている二つの国の木の玩具に最も関心を寄せながら収集と研究を行っている。

一つは、チェコとの国境付近に位置する山岳地帯の旧東ドイツのエルツ地方の木工玩具である。このエルツゲビルゲ(エルツ山地)では、グリーンハイニヒェンやザイフェンが木工玩具の生産地として歴史がある。このエルツの玩具で世界的に有名なのは、およそ300年前に家内工業から発した木工芸の「くるみ割り人形」である。また、口から煙を出す「パイプ人形」やロウソクの炎の熱でプロペラが回転する「クリスマスピラミッド」、「天使や坑夫のロウソクたて」や「ミニチュア人形」などもよく知られている。このモチーフは玩具を生産する村々によって伝統的に受け継がれ、今でも昔のままの姿を見せてくれている。このエルツゲビルゲは、およそ500年前頃から豊

富な錫の鉱山として栄えた山岳地方である。ところが、封建君主の圧政と鉱物の枯渇によって生活が圧迫し、貧村地帯の様相を呈していた。そのような中、村民の苦肉の生活の知恵から生まれてきたのが、菩提樹やブナなどの木を使った手工芸玩具たちなのである。特に、長い間の貧困生活の知恵から、少ない資源を効率的に活用することを学び、動物の形をロクロを使ってバームクーヘン状に作り、それを裁断して同じ形の玩具を大量に作るライフンドレーエン製法を生み出した。これらの木工玩具は、一品ごとに丹念に製作されているハンディークラフトで、そのクラフトマンシップから生み出される繊細な技と独特な風土を感じるデザイン性は、ドイツ人の民族的な気風と相俟って、世界的に高い評価と賛美を得ていると言えよう。

ところで、このエルツゲビルゲのザイフェン村の玩具に「ノアの方舟」がある。この玩具は1850年にアメリカに輸出され大ヒットとなり、これが契機になってエルツ地方の玩具の名を世界的に広めた。私は、当時のオリジナルに比較的近い「ノアの方舟」の玩具をコレクションしている。この玩具の発生の由来について調べているうちに、アメリカのニューイングランド地方の木工玩具にたどり着いた。実は、二つ目の国とはアメリカである。但しアメリカ全土ではなく、あくまでニューイングランド地方の木工玩具にこだわりがある。

ニューイングランド地方とは、アメリカの北東部の地域を指し、マサチューセッツ、コネティカット、ロードアイランド、ニューハンプシャー、バーモント、メーンの6州からなる地方である。この地は、1614年にイギリスの探検家J. スミスによって名付けられた。その6年後に、ピルグリム・ファーザーらが信仰の自由を求めてメンフラワー号に乗り、新大陸ニューイングランドに渡来した。いわゆる清教徒・ピューリタンの入植である。つまり、彼らはアメリカのヤンキーの原型である。彼らは信仰深く、自立心、公共心が高く、勤勉な生活態度、伝統を重んじる等の気質があると言われている。現在でもこの地方は、一種独特な伝統が保持されている。例えば女たちはキル

トを縫い、カゴを編む。男たちは陶器を焼き、木製の人形や丈夫で座り心地のよい椅子や家具を作り続け、自給自足的な生活をしている人たちも数多くいる。

このニューイングランド地方(特にバーモントやニューハンプシャー州)に古くから伝わる木工玩具の中にも「ノアの方舟」がある。この玩具はサンデートイと呼ばれ、安息日(この日は一切の仕事などを休み宗教的儀式を行う)に唯一聖なる玩具として遊びが許されたものであると言われている。入植当時、当然玩具を購入することは無理のため、父親が子どものために手作りして与えたか、イギリスから子どもの宝物として大切に持ち運んだものと推測できる。いずれにしても、ドイツやアメリカの博物館に展示されている古典的な「ノアの方舟」のデザインや色彩が実によく似ており、材料や制作技術にも共通点が多い。

私がニューイングランド地方の木工玩具の中で、特に強い関心を抱く物の中に「Whirligig(ウィルリギグ)」がある。この玩具は通称「風のおもちゃ」とも呼ばれ、パドルの腕が特徴の木彫りの玩具のことである。最近では、プロペラで風を受け、何体にも連結したフィギュアを動かす複雑なアート・トイとしてのウィルリギグも多い。よくアメリカの西部劇映画のシーンなどで見かける「Weathervanes(風見鶏)」もその一種と言えるであろう。このウィルリギグの起源は、先に述べたピューリタンのニューイングランド地方入植にさかのぼることができ、「ノアの方舟」と同様な意味をもつと言われている。現在ニューイングランド地方でも、このウィルリギグを制作している職人(作家)はごくわずかである。その中で最も著名な作家と言え、テッド・アルフレッドとその妻バーバラ夫妻であろう。当初夫妻は、博物館に展示されている伝統的モチーフによるウィルリギグを復刻していたが、最近では伝統的な技術に最新の技術とデザイン感覚を取り入れ、著作権付きのオリジナル作品を制作している。彼らの全ての作品はリミテッドエディションであり、作品の全てに日付やサイン、そして簡単なコメントが書かれている。この夫妻は、職人氣質でとてもプライドが高く、作品を

大量には制作しない。したがって、夫妻の作品を入手することはアメリカ国内でも困難であると言われているが、私はニューイングランド地方の輸入家具・雑貨のオーナー馬場氏のおかげで20点ほどコレクションしている。もちろんすべて木の動く玩具である。おそらく夫妻の作品のコレクションとしては日本一であると自負している(と言ってもこの玩具に興味がある人はまずいないと思うが...)

ここまでエルツとニューイングランドの玩具について述べてきたが、最後にこの二つの地方の主な共通点を挙げてみたい。まず、地形的な共通点である。エルツもニューイングランドも共に山地に位置し、木材や自然が豊富であり、冬は深い雪に閉ざれる環境にある。二つ目はキリスト教徒としての信仰心が厚く勤勉である。玩具のデザイン性は、宗教や物語、身近な生活や労働場面などをモチーフにしている点である。このことは、我が国の木地玩具や木工からくり玩具の生産地にも類似性があると言える。

今回は、紙面の関係でこの程度に止めておくが、この研究が多少でもまとまりがつけられたら、本学会で報告したいと思っている。



プロペラの回転で首を振りながらステップを踏み、バンジョーを弾くと犬がしっぽを振るアクションが楽しい

Whirligig / 「Old Black Joe」

Ted Alfred & Barbara Alfred original .

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

管理職としての3つの実践

堀川紀夫（新潟県三条市立月岡小学校）

1. はじめに

公立中学校に30年間（教頭5年）勤務し現在、小学校長2年目である。教諭の時代は、現代美術のよさを生かした創意ある美術教育を求めて、題材開発とその実践を研究テーマとしてきた。

教諭と管理職とは役割が根本的に違う。教頭の期間で美術科の授業を担当できたのは1年間のみであった。また、校長は法令のとおり所属職員の指導や監督はできるが、子供への直接的な授業はできない。

そこで、学校経営方針により環境構成を重視することにした。校舎美化及び掲示活動の活性化と充実を求め、自ら率先垂範し、図工・美術のよさを生かした学校づくりを目指してきた。

その他、図工科の機業にTTの立場で協力したり、教員養成実地指導や校内外の職員研修の講師として自論を展開したり、図工・美術教育の振興に努めてきている。

今回、本学会通信への寄稿の機会を与您いただき、管理職としての6年半の歩みの中から図工・美術の領域に位置付く実践を3つ報告したい。

2. 3つの実践

(1)「聖火台づくり」

ア 実践に向けて

新潟県では、7年前より学校の活性化を目指し、3年サイクルの「スクールプロジェクト

事業」が展出されている。学校規模に応じて予算が配当される。12学級で約100万円。その予算に基づき、手作り備品制作の「聖火台づくり」が可能となった。

イ ねらい

オリンピックの「聖火」、国体の「炬火」と同じ意味文脈にある「火」を同じように燃やし続けることにより、年間で最大の学校行事である体育祭・運動会の活性化を図る。

ウ 制作のポイント

バーナーは市販の中華料理用の強力なものを利用する。台の高さ250cm程度、ワイングラス型の鋼鉄製で5～6名の児童生徒で移動が可能な重さとする。予算は約20万円。設計し、施工は地元の鉄工所をお願いする。

エ 考察

これまで、松代中、板倉中そして現任校と合わせて3基の制作を担当した。

燃料はプロパンガスで1日中燃やし続けて10kgのボンベがほぼ終わる。その費用は約5000円程度である。年に1回だけの使用のためにぜいたくな感もあるが、炎々と燃え続ける火の芸術の教育的、演出的、象徴的な意味作用は強力で感動そのものである。

(2)「校内ギャラリーの運営」

ア 実践に向けて

校舎内には作品展示にふさわしい壁面や空間が必ずあり、ギャラリーとしての活用が可能である。

新指導要領では「校内の適切な梶所に作品を展示するなどして、平素の学校生活においてそれを鑑賞できるよう」「地域の美術館などを利用すること」と配慮事項にある。この後者についてはほとんどの学校で交通手段がネックである。そのため校内に美術能などに近似する機能の設置が求められてくる。余裕教室の活用と相俟ってギャラリーの設置と実質ある運営が今日的課題である。

イ ねらい

校長室前の廊下や玄関付近の壁面及び出窓部分を作品展示の校内ギャラリーとして活用し、情操教育、美術鑑賞学習の一助とする。

ウ 運営の内容

子供の作品展
職員や保護者の作品展
地域の方々の個展やグループ展
県内外の著名な作家の作品展

エ 考察

板倉中と本校での実績がある。板倉中では国際的な旅行家で写真の山崎慎治氏、七宝焼の山本正男氏、水墨画の笹川春艸氏、洋画の小関育也氏、そして私の個展も行なった。いずれも2週間以上の長期の展示で、子供たちにとって本物に触れる貴重な機会となった。

本校では昨年10月に設置し、皮切りに鉄の彫刻の霜鳥健二氏の個展を開催した。現在は6学年の共同制作の立体作品を展示している。今後10月の文化祭に合わせて地域の方々の作品展を行なうように計画を進めている。

既に多くの学校での事例もあるが、校内ギャラリーは運営の工夫で学校を開く有効な手立ての一つとなる。

(3) MIE (Mascot In Education) の試み

ア 実践に向けて

私自身が親となって、子育ての過程でぬいぐるみやキャラクター玩具が身近にあった時期があるが、その意味作用や教育的な効用について深く考えたことはなかった。

昨年の文化祭のバザーでカエルのぬいぐるみを買った際に一つのひらめきがあり、その類を沢山コレクトすることとなった。現在、私の校長室には大小さまざまな30体以上のぬいぐるみ及びキャラクター玩具が同居している。

イ ねらい

ことは遊びやしなれをもとに、学校の教育目標などをマスコット化し、子供の心の居場所づくり、学び、遊び、癒しの一助とする。

ウ 試みの実際

教育目標は「考える、助け合う、頑張り抜く」である。まず最初の試みはカエルのぬいぐるみによる「カエル 考える」の常識的な意味設定であった。続いてゾウを買って「助け合う 助け合うゾウ」とこじつけて学校のマスコットとした。その2つをギャラリーに展示したら子供たちに人気抜群。それは子供たちと私との懸け橋となり、そこは子供たち

の新しい遊び場所となった。

その後、新年を迎え干支のウサギのぬいぐるみと「二兎を追わず」「うさぎ耳」「うさぎの登り坂」や「うさぎとかめ」などの諺や昔話に対応させて展示した。「頑張り抜く」は渡り鳥の雁に着目したがマスコット化は実現しなかった。

昨年12月に新指導要領が発表になり、教育課程総体の建直しが焦眉の課題となった。今年度、その方向に鑑み、教育目標の部分改定を行なった。新教育目標を「考える、思いやる、積み上げる」とした。マスコットについてはカエルは変わらず、ゾウは転用し「思いやる 思いやるゾウ」とした。「積み上げる」についてはマスコット化から思考モデルそのものとなった。「積み上げる」でイメージしたのはもちろん積み木。お古の積み木と算数の面積や体積の指導で使う立方体や三角柱などを掻き集め、また印刷用ロール巻き原紙の芯の紙パイプを切った円柱などを大小混ぜて置いてみた。そこは即刻、学年を超えた遊びの場所となった。積み上げては崩すという、子供の創造と破壊の小世界が余念なく繰り返されている。

エ 考察

カエルやゾウのマスコットから始まり、トトロなどのキャラクターや積み木をギャラリーに常設的に展示して一年から半年近く経過した。この間の子供たちの反応、とりわけ仲間遊びの生成を見取る中で、それらが低学年はもとより高学年の大半にとっても教育的に有効であることを実感した。今後ともこの実感を大切に子供の目線に立ち、その心を読み取り、寄り添い、育んでいきたい。

マスコットやキャラクターは図工・美術(造形)の領域で生み出されるものである。その意味でMIEなる造語を提案し一般化を図りたい。

3. おわりに

以上のとおり、現在、校長室とギャラリーが私の日常的なフィールドとなっている。子供たちを子供たちとして受容し、ふれあう日々心洗われる発見があり、思索のための素材がある。そこでは良寛と手毬の世界に想いを馳せたり、フレーベルの恩物について改めて得心したりしている。

書評&文献紹介

『表現主義論争』池田浩士編訳 れんが書房新社，1988

長谷川 哲哉（和歌山大学）

この本は、政治的に緊迫した1930年代後半に、表現主義とファシズムの関係を主題として、ナチス・ドイツ以外のヨ・ロッパとロシアで繰り広げられた論争に直接、間接に参加した諸論文（合計38本）を翻訳、編集し、解説をくわえたものである。編訳者によれば、論争後すでに半世紀が過ぎた今なおこの表現主義論争は今世紀最大の深刻な文化論争としてアクチュアルであり続けているし、またそこでの「真の争点」は「芸術の前衛とは何か？」であったという。

論争の発端は、ヒトラ - 政権獲得後にナチズムへの支持表明をした表現主義詩人のG・ベンに対する共産主義文化政策者B・ツイ - グラ - による批判であった。そこでの最大の指摘は、「表現主義とはどんな精神の子であったのか、そしてこの精神は、遵守するならばどこへ通じていくのか、つまりファシズムへなのだ」、というものであった。こうしてツイ - グラ - のベン批判は、「表現主義の洗礼を受けた文化活動を始めた自分たち自身の共通の危険として」、表現主義からナチズムへの道をつきつけるものであったが、これは反ファシズム闘争を進めるために必要な「敗北の総括と自己批判の作業」の一環であった。しかしこのベン批判の前に既に、ツイ - グラ - と共通の立場にたったの、共産主義イデオロ - グであるG・ルカ - チによる包括的な否定的評価の論文「表現主義の〈偉大さと頹落〉」が発表されていた。そこでの最も鋭利な指摘は、表現主義が理念を唱える際の「見せかけの行動主義」や「パセティックで空虚な、演説口調のマニフェストの方向」は、そのままファシズムのための「遺産」となりうる、というものであった。これらの批判に対して、表現主義運動の最大の推進者H・ヴァルデン

は、「俗流表現主義」と真の表現主義とを区別して、表現主義総体の「名誉回復」をはかった。彼は、「芸術はだれもが創出し受容でき〔……〕理解できるものでなければならない」とし、芸術の民衆性を主張するとともに、真の表現主義は「単に新しい諸形式を創出した」のみでなく、「生活の新しい形式を表現した」と指摘した。こうして「<表現主義>という言葉が重要なのではない。その内容が重要なのだ」という。要するにヴァルデンの見解は、表現主義を現在(当時)の反ファシズム闘争を担う芸術的前衛として評価する立場にたつものであった。芸術の民衆性、民衆の古くからの表現意志についてはE・プロッホも類似した見解をその表現主義弁護において示した。マルクス主義が「先進的」「意識的」な反対派としての工場プロレタリア - トのなかにブルジョワ社会の墓掘り人を見るのに対し、プロッホは農民や小市民のなかに「無意識的」「自然発生的」な現実否定の要素や、「前近代的」「非合理主義的」な反逆志向を見ようとしたのであった。この本の編訳者も、ほぼこれと同一の立場にたって、芸術革命・革命芸術として表現主義を規定し、表現主義の民衆性を高く評価している。

最後に、表現主義および表現主義論争と、現在のわれわれとのあるべき関係についての編訳者の見解を引用しておこう。「表現主義が試みた表現様式や表現手段をわれわれの現実に適用することは、論争のなかで批判者や擁護者が依拠したさまざまな概念や定義を援用することと同じく、ほとんど何のみのりももたらさない。むしろ、表現主義時代そのもののなかではもちろん、論争当時にもおよそ考えられなかった視角、その後の歴史過程のなかでわれわれが獲得することができた視角から、論争と表現主義とに肉薄することを、われわれは求められている。」そして「こうした視角は、論争そのもののなかから読者自身が、それぞれの関心や実践上の要求に応じて、いわば発見していくべきものであろう。」かくして、われわれ美術教育研究者は表現主義論争の中から、例えば表現主義の芸術観から決定的な影響を受けた美術教育の目標・内容・方法の有する正負、明暗の両側面を見出し、熟考していくことができるであろうし、それをすべきであろう。

研究部会報告

「基礎データベース構築部会」報告

三重大学 上山 浩

本部会は平成7年の3月に正式発足した。平成5-6年当時、美術教育研究に特化した基礎的なデータベースの構築を始めとして、美術教育研究におけるコンピュータによる集中的な情報の検索・収集活動を啓発・促進・支援を求める声が聞かれるようになった。本部会そのような声にこたえた形で発足した。

本部会の使命は、文字通り、美術教育の研究に資するデータベースの開発にあった。しかし、現実にはそれを実行するには、膨大な労力と相当の資金が必要となる。限られた部会員数および予算的な裏付けの無い中では、それは難しい。しかし折しも、本部会の発足とほぼ同時に、インターネット利用の一般化が進むこととなり、そのインターネットが本部会の活動をアシストすることとなった。

本部会での、情報交換や討議は、電子メールを用いた同報システム（メーリングリスト：ML）を用いている。MLを通じた討議の中で、実現を目指すデータベースの形態について、WorldWideWebを用いることや収録データを基本的な研究成果・実践記録などとする、またWebにより配信が可能になる画像、音声、ビデオ映像も積極的に取り入れていくことなどを方針とした。それを受ける形で、7年に宮崎大学情報処理センターのサーバ内に暫定的なホームページを開設した。このページは、インターネット普及の比較的初期のホームページとして、教育・メディア関係者から一定の注目を集めた。このホームページを原型として、8年の学会役員会にて学会公式のホームページを公開することが承認された。公式ホーム

ページは学情センター内のサーバに置くこととし。現在は、学会の公式情報と学会誌の書誌情報を中心に公式ページを運用している。その他、本部会の重要な業務として、学情センター電子図書館サービス（インターネットを介した雑誌の購読システム）への本学会学会誌の登録の実務作業を行っている。また、部会連絡用MLの他に、対象を学会員外にも広げたオープンな美術教育MLの運営を行っている。

本部会の活動は、インターネットの普及と軌を一にしてきたとすることができる。また、学情センターとの関係も深い。今日、インターネットの利用が定常化し、また、学情センターとのコンタクトも事務局の業務に吸収された中、本部会の使命について問い直す声も聞かれる。

その一つは、部会の活動を、教育現場におけるコンピュータ利用法の開発に広げ、むしろ、そちらに力点を置いた研究活動を共同で行おうというものである。これは、本部会のこれまでの活動が作業部会的傾向が強かったことに対し、研究部会に本来の活動の母体として転換を意味する。

その一方で、この部会の元来の使命であるデータベース構築について、まだやるべきことが残されているのではないかという指摘もなされている。具体的には、学習指導案、作品写真、授業ビデオなどの実践記録をデータベース化する努力の再開、及び、博士論文・修士論文のリファレンス情報を可能な限り収集し公開するといった活動が上げられる。

いずれにしても、本部会の今後のあり方は、学会全体としての研究部会の位置づけの問い直しや、再編の動向に連動することになると考えられる。

【連絡先】

基礎データベース構築部会事務局
〒514-8507 津市上浜町1515
三重大学教育学部（美術教育講座）
上山 浩
TEL：059-231-9280
E-mail：ueyama@edu.mie-u.ac.jp

情報コーナー

情報提供のお願い

会員に関する情報(出版、異動、住所変更、受賞などの情報)を随時掲載します。情報検索の物理的条件と公平さを考慮し、掲載内容については自己申告を原則とします。

掲載を希望される方は、事務局通信担当又は世話人宛に、E-mail、FAX等でお知らせ下さい。

[事務局通信担当] 宇田秀士

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
TEL&FAX: 0742-27-9223 (研究室直通)
E-mail: udah@nara-edu.ac.jp

[学会通信世話人] 新井哲夫

〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 群馬大学教育学部
TEL&FAX: 027-220-7316 (研究室直通)
E-mail: arai@edu.gunma-u.ac.jp

投稿のお願い

通信の各コーナー(「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート/実践報告」等)への投稿を随時受け付けています。

原稿は、1ページ当たり20字×88行(表題、著者名10行分を含む)にまとめ、E-mail又は

郵送(できるだけワープロ原稿でお願いします)で、宇田又は新井まで。写真等の図版も掲載可能です。

第22回美術科教育学会兵庫大会について

* 会期 2000(平成12)年3月27日(月)~29日(水)

* 会場 兵庫教育大学 〒673-1415

兵庫県加東郡社町下久米 942-1

* 大会事務局(は大会会長)

辻田嘉邦 TEL:0795-44-2253 (研究室直通)

福本謹一 TEL:0795-44-2255 (研究室直通)

芸術系事務局 TEL: 0795-44-2253

FAX: 0795-44-2259

公開シンポジウム(プレ学会)について

* テーマ「越境の時代・美術教育実践学の視座」

* 日時 1999年12月4日(土)午後1時~3時

* コーディネーター 辻田嘉邦(兵庫教育大学)

* パネラー

長島真人(鳴門教育大学・音楽科教育)

有道 惇(岡山大学・音楽科教育)

永守基樹(和歌山大学・美術科教育)

茂木一司(群馬大学・美術科教育)

* 会場 サクラクレパス本社ビル7階会議室

大阪府中央区森ノ宮中央1-6-20

(〒540-8508) TEL: 06-6910-8807

* 連絡先 同

* 参加費 無料

よい秋や犬ころ草もころころと 一茶

今号は、執筆の先生方には早々に原稿をいただき、新井理事の編集作業も早くに済んでおりましたのに、宇田の個人的な事情でお手元に届くのが遅くなり申し訳ありません。

残暑がうそのように、いつのまにか秋の気配が漂ってきました。

編集に使用しているコンピュータのトラブルもありましたが、インセアのオーストラリア大会に出向いておりました。昨年度のアジア地区会議で興味を持ち、発表はせずのjust looking参加でしたが、たいへん勉強になりました。

とはいっても、ことばの壁はあつく、私一人では疎外感のみ抱いて帰って来るところでしたが、英語の堪能な福本(兵庫教育大)、永守の両

氏のお陰で会場の雰囲気をつかうことができました。次回世界大会は、3年後ニューヨークで8月末に開催される予定です。

来年度の文部省科学研究費の募集・書類提出が始まっている頃と思います。教育現場や地域社会、美術館などを巻き込んだ研究を進めていくためには、ある程度の資金も必要でしょう。会員諸氏の募集の参考として通信に掲載を予定しておりますので、本年度採択された研究区分、研究テーマ、代表者名、金額などをお知らせ下さい。ちなみに、昨年度の情報は、第32号に載せています。

次号では、学会誌論文考、インセア報告、3月の兵庫大会関連情報などを掲載の上、12月末に発行の予定です。(宇田)

編集後記